

# 書く技法，生きる条件 岩山太次郎先生のご退職に際して

林 以知郎

岩山太次郎先生がご定年退職を迎えられ、この年度をもって同志社大学文学部を後にされることを、今もなお実感しえないままにお送りする言葉を捜しあぐねている。本学文学部英文学科および大学院を経て文学部助手に赴任された1958年から数えても45年間、中学高校時代を加えれば半世紀を同志社人として過ごしてこられたことになる。この間、研究者として、教育者として、さらには内外の大学行政の舵取り役として、そして私どもの英文学科の要として、岩山先生はおそらく私などではひとりで背負い込めないほどに多くの責務と周りの者の期待を担われてきた。アメリカ文学会関西支部長、本部代議員などを歴任されてアメリカ文学の領域で指導的な研究者として活躍されながら、同志社大学の運営行政においても、主要なものだけ挙げても、アメリカ研究所長、文学部長、二度におよぶ教務部長、そして二期に至る大学長の重責を務めてこられた。いま先生に感謝しおねざらいする気持ちをささやかな文に綴りながら、あらためて二つの思いを強く抱いている。ひとつには、上野直蔵先生をはじめとする先達が切り開かれた流れを受け継ぐ形で英文学科のアメリカ文学研究を発展させてこられた先生方の世代がいかに豊かな個性に彩られていたか、という羨望にも似た思いであり、そしてこの個性的な世代の中であって独自の学問姿勢と人間的肌合いを持続させてこられた岩山先生のおおいなる存在感である。いまひとつの思いは、先生のご経歴をあらためて追わせていただいた時に、そこにひとりのアメリカニストが自己を形成していく軌跡が確かに浮かび上がってくる、そんな感慨である。本

学大学院を経て60年代初めにケニオン・カレッジやアイオワ州立大へ留学なされた先生がそれ以降、71年からは文学部教授として、74年からは博士課程教授として、19世紀アメリカ・リアリズム文学論、モダニズム以降のアメリカ詩、さらにはユダヤ系作家の小説群を中心にアメリカ文学研究を深めていかれたことは誰しもが周知するところである。先生のこのご研究歴はそのまま、戦後のこの国にアメリカという異文化がおおいなる存在としてたち現われ、そして知的に誠実であろうとする者がアメリカという強大な他者と正面から向かい合い、理解と共感の発見を試みようとする営みを一個人の生き方として映し出すものであった、という思いを抱く。

岩山先生が研究者としての道のりの最初の時期に、修士論文の対象としてヘンリー・ジェームズを選ばれ、またアイオワでの Master of Fine Arts 論文の主題に日本現代詩を取り上げられたことは、それ以降の先生の研究軌跡と方法を承知している者の眼から振り返るならば、しごく自然なものを感じさせる。後に「ジェームズの『創作論』論考」として結実をみるように、二つの世紀をまたいで大西洋の両岸から生の流動に形をとらせる小説の実験を突き詰めていったこの作家の姿は、先生の研究の中心に常にあり続けているように思う。そしてまた、ジェームズからモダニズム文学へと流れ込んでいく実験性に対する先生の関心は、散文の分野にとどまらず詩的表現の可能性を吟味する研究業績群として形をとっていくこととなる。テキストの内的構造やジャンル定型などフォルマリズム的側面をふまえながらも、多様で流動し続ける人間の生と経験をその固有性において捉え形を取らせようとする想像力ののびやかな営みを詩学とするならば、岩山先生の研究スタイルは小説と詩の詩学的解明とでも名づけうるのではないかとかねてより思っている。修士論文と MFA 論文で芽生えていたこの研究スタイルがそれ以降の長い学究生活を通して様々な作家、ジャンル、テキストを対象に発展していく軌跡を私なりに整理させていただきたい。

わが国における、というよりもむしろ当のアメリカにおいてというべきだ

ろうが、アメリカ文学研究はイギリス文学を準拠の枠組みとして置いた時にその独自さを際立たせてくる、というのは経験的事実であろう。したがって岩山先生が学究としての最初の論文群をサッカレイ、ジョイス、フォスターなどの小説論として書きはじめられたことに不思議はない。英文学科の学風として私たちもよく、「イギリス文学を知らずにアメリカ文学を語るのはせつかくの面白みを知らずにいることだ」と教えられたものである。「Becky SharpとSnobの世界に対するThackerayの態度」(『主流』22号, 1960)や「主題と構造の面から見た*A Passage to India*の第1章の意義」(『主流』25号, 1964)においては、アメリカ小説のロマンス的性格というしばしばなされる指摘とはうらはらに「非ロマンス的」でイギリス的な小説テキストを、その構造的側面に着目して論じておられる。そうではあるがその論の進め方からは、先生が次第にアメリカ文学を研究の中心に据えていかれる方向が垣間見える気がする。たとえば*A Passage to India*論であるが、フォスター自身の小説のパタン概念を冒頭章に援用して作品の循環的構造を指摘されながら、先生が惹かれておられるのは文化的他者を受け入れることを拒絶する異郷の空間の前に立ちつくす人間の姿であって、そのような拒絶する空間との暴力的緊張に満ちた出会いはアメリカ文学が描き続けた原風景でもあっただろう。これらイギリス小説論考から「『緋文字』研究 “Dark Necessity”を中心に」(『主流』23号, 1961)へと補助線を引いてみれば、アメリカ文学論に至るパッセージが見えてくる。『主流』が特集企画で誌面を飾った最初の試みである『緋文字』論特集に収められた本論は、アメリカン・ロマンスのウル・テキストとでも言うべきこの作品に主要登場人物それぞれによる三種類の探求モチーフを見とり、神があらかじめ定め給うた「暗い必然的な運命」の受容とその果てに垣間見える救済の可能性にこれら探求物語り群を括るメタ構造を読み取ろうとする試みである。ここでもまたたち現われてくるのは、人間経験の現象面での「暗さ、非合理性」の前に立ちつくす人間の姿であり、「森の荒涼たる大自然」の前に佇みながら救済を渴望する人間の姿である。ワゴ

ナーやメイルの先駆的な業績がつい数年前に上梓されたばかりのこの時期に書かれた『緋文字』論は、いま読み返しても新鮮な洞察に富んでいる。

無類の小説好きである岩山先生は、小説の面白さは細部にこそ宿ることを知り抜いておられる読み手であるが、同時に小説をその織り地の全体から大掴みにする直感を豊かに備えておられると思っている。作品の織り地の中に部分を置いてみるこの感覚は、先生のアメリカ詩論考にも窺い知ることが出来る。ごく初期のものを含めてエミリー・ディキンソン論とロバート・フロスト論をそれぞれ複数数えることが出来るが、その内でも「Emily Dickinsonの詩の Variant Readings の研究の重要性 Johnson 版に対する態度として」（『英文学研究』42巻2号、1966）がよい例である。本論発表の10年ばかり前に出版されるや定本としての權威を獲得したトマス・H・ジョンソン編の『全詩集』に採用された読みの妥当性を、異本照合の手法で吟味される手つきは鮮やかである。同時に、聖書、*Bay Psalm Book*、およびシェイクスピアを準拠として当該詩行にvariant再考の可能性を示唆されていく論の運びは、テキスト確定をめぐる技術的論考から踏み込んだディキンソン論、詩人の知的文化的風土を織り成していた織り地と詩テキストのテキスチャを絡め合わせてみる論考にまで深まっている。私個人の好みから言うならば、「Robert Frostの*A Masque of Reason* 絶対者への懐疑と人間存在の苦悩」（『主流』35号、1973）に惹かれる。論の主題としては先に引いた『緋文字』論の「暗い必然的運命」と共鳴しあう重いものであるが、ヨブ記を合わせ鏡にしてフロストの仮面劇を読んでみる楽しみを丁寧到手ほどきされる思いがする。そして何よりも、論文冒頭に置かれたフロストの引用「詩は喜びに始まり、英知に終わるのである。それは喜びに始まり、… 人生の解明に終わる - かならずしも宗派や崇拜のもとになるほどの、偉大な解明とはかぎらない。混乱に対する瞬間の休止にとどまることもあろう。」に、岩山先生の文学観を理解するひとつの手がかりを感じ取ることが出来る気がするからである。

先生の文学研究、文学観の中心にあるのがヘンリー・ジェイムズの創作技

法論であることは先に触れておいた。この点をめぐる業績はジェームズとハウエルズをめぐる多くの論文群であるが、その内もっとも核心的な論考は「Henry James の“The Art of Fiction”における小説の「道徳性」 19世紀後半の小説論でしめる位置 (『アメリカ研究』2号, 1968)であろう。ウォルター・ベザンが「創作技法論」で掲げた「意識的な道徳的目的」を小説の必須要件とする主張をジェームズの「創作技法論」と対比させながら19世紀英米小説状況のコンテクストに位置づけようとする本論は、一連のリアリズム小説論考中でも射程広く包括的な業績である。「意識的な道徳的目的」をもってして小説の道徳性とみなすのではなく、小説がトータルに伝達する「現実感」、描かれた経験が「生きたものであるか、本物であるか、人生についての直接的印象または把握であるか」、すなわち「人生の幻影」を言語化する営みに誠実であるか、という尺度に小説の「道徳性」を求めるジェームズの創作論は、19世紀後半から20世紀にかけてのイギリス文壇のみならずジェームズの衣鉢を継いだアメリカ小説家たちとの連続性・差異性をも射程におさめた広い視野の中で俯瞰されている。ジェームズの創作論論議はその延長線上にロマンスのジャンル特性への考察を呼び込んでいくことが予想されるが、先生が最終節で紹介されているチェイスのアメリカ小説論が上梓されて10年しか経っていないこの時期に展開された本論は、後のベルの画期的な業績などのアメリカン・ロマンス論争に先鞭をつけた論考と位置づけうるだろう。

「人生の幻影」に小説言語を通して形を取らせる営みを小説家の技法であるとともに倫理的誠実さであるとしたジェームズの文学姿勢は、言ってみれば「書く術」がすなわち「生きる術」へと転じていく作家の生き様の表明であったろう。書く行為と人間の生きる条件への倫理的自覚が一体の課題となっていくアメリカ文学の動きとして岩山先生が惹かれていかれたのは、60年代頃から取り上げていかれたユダヤ系作家の作品群をめぐる論考である。ロス、マラマッド、とりわけソール・ペローを中心とした作家たちがマージナルな社会的少数派であった初期の時代からやがてアメリカ小説の主流を形づくっ

ていくまでの時期をリアルタイムで追う形でこれら一連の論考が書かれていったのであるから、『*Saul Bellow*』(山口書店、1982)などを通して先生はアメリカ・ユダヤ系作家のわが国における良き理解者、紹介者として多くの貢献をなされてきた。アメリカ社会におけるユダヤ系市民の立場が緩やかに変動していく過程を背景にペローの創作姿勢が微妙に変化していく兆しをその中期の代表的二作品に見とった「マージナル・マンの生きる条件 ソール・ペローの*Herzog*と*Mr Sammler's Planet*」(『英語青年』118巻、3号、1972)は、無類の面白さと可能性を秘めていたこの時期のユダヤ系作家への先生の的確な理解と共感の深さをうかがわせてくれる。この論考から、世界の崩壊を予知しながら愛する甥の死を看取ったサムラー氏が「生きる条件」を認識するくだりを論じた一節を引いてみる。「そしてただ一つ彼に残ったものは、人間としての義務という、どうしてもはたさなければならないものであった。… 経験はもう色あせ、議論も駄目であり、人間がやらねばならないことは、おたがいにはたさなければならない義務の遂行であり、それを知りつくすことが人生の鉄の掟であることがわかったからである。」サムラー氏のこの思いが人間の「生きる条件」の最終的解明であるのか、それとも先に引いたフロストの言葉を引けば「混乱に対する瞬間の休止にとどまる」ものであるのか、その答えはない。そうではあっても、混乱と混沌を前にして世界と自らの関係づけに倫理的一体性をみとる瞬間を一瞬ではあっても直感したならば、その直感をもって「生きる条件」として引き受ける潔さを人間としての誠実さと呼ぶことにはなかりはなかるう。大学院時代に岩山先生のセミナーでジェイムズの『使者たち』を読んだ時から記憶に残っている一節がある。「(認識は)錯覚であったのかもしれない。でもそのような錯覚の記憶をもたぬ人間になってはいけないのだ。」ジェイムズ、フロスト、ペロー、岩山先生が惹かれ論じてこられたこれらの作家のコラージュをしつらえてみることで、職場を共にさせていただく機会をもった年若い同僚から岩山太次郎先生の人間的誠実さへの賛辞に代えさせていただき、お送りする言葉としたい。